

【使徒書日課】ヨハネの黙示録 19章6～9節

6わたしはまた、大群衆の声のようなもの、多くの水のとどろきや、激しい雷のようなものが、こう言うのを聞いた。

「ハレルヤ、

全能者であり、

わたしたちの神である主が王となられた。

7 わたしたちは喜び、大いに喜び、

神の栄光をたたえよう。

小羊の婚礼の日が来て、

花嫁は用意を整えた。

8 花嫁は、輝く清い麻の衣を着せられた。

この麻の衣とは、

聖なる者たちの正しい行いである。」

9 それから天使はわたしに、「書き記せ。小羊の婚宴に招かれている者たちは幸いだ」と言い、また、「これは、神の真実の言葉である」とも言った。

【福音書日課】ルカによる福音書 24章13～35節

13 ちょうどこの日、二人の弟子が、エルサレムから六十スタディオン離れたエマオという村へ向かって歩きながら、14 この一切の出来事について話し合っていた。15 話し合い論じ合っていると、イエス御自身が近づいて来て、一緒に歩き始められた。16 しかし、二人の目は遮られていて、イエスだとは分からなかった。17 イエスは、「歩きながら、やり取りしているその話は何のことですか」と言われた。二人は暗い顔をして立ち止まった。18 その一人のクレオパという人が答えた。「エルサレムに滞在しているながら、この数日そこで起こったことを、あなただけのご存じなかったのですか。」19 イエスが、「どんなことですか」と言われると、二人は言った。「ナザレのイエスのことです。この方は、神と民全体の前で、行いにも言葉にも力のある預言者でした。20 それなのに、わたしたちの祭司長たちや議員たちは、死刑にするため引き渡して、十字架につけてしまったのです。21 わたしたちは、あの方こそイスラエルを解放してくださいと望みをかけていました。しかも、そのことがあってから、もう今日で三日目になります。22 とところが、仲間の婦人たちがわたしたちを驚かせました。婦人たちは朝早く墓へ行きましたが、23 遺体を見つけずに戻って来ました。そして、天使たちが現れ、『イエスは生きておられる』と告げたと言うのです。24 仲間の者が何人か墓へ行ってみ

たのですが、婦人たちが言ったとおりで、あの方は見当たりませんでした。」²⁵そこで、イエスは言われた。「ああ、物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちの言ったことすべてを信じられない者たち、²⁶メシアはこういう苦しみを受けて、栄光に入るはずだったのではないか。」²⁷そして、モーセとすべての預言者から始めて、聖書全体にわたり、御自分について書かれていることを説明された。

²⁸一行は目指す村に近づいたが、イエスはなおも先へ行こうとされる様子だった。²⁹二人が、「一緒にお泊まりください。そろそろ夕方になりますし、もう日も傾いていますから」と言って、無理に引き止めたので、イエスは共に泊まるため家に入られた。³⁰一緒に食事の席に着いたとき、イエスはパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いてお渡しになった。³¹すると、二人の目が開け、イエスだと分かったが、その姿は見えなくなった。³²二人は、「道で話しておられるとき、また聖書を説明してくださったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」と語り合った。³³そして、時を移さず出発して、エルサレムに戻ってみると、十一人とその仲間が集まって、³⁴本当に主は復活して、シモンに現れたと言っていた。³⁵二人も、道で起こったことや、パンを裂いてくださったときにイエスだと分かった次第を話した。

一緒に歩き始めている！【こども説教のために】

先週のイースターに続いて、今日も教会は主イエスのご復活を記念します。

二千年前の最初のイースターの日、主イエスのご遺体があるはずの墓に見当たらないことを発見した女の弟子たちは、仲間の弟子たちに、「**イエスは生きておられる**」と報告しました。仲間の弟子たちの多くは、「そんなバカなことがあるか」と言って聞き流してしまいましたが、ペトロや何人かの弟子は、自分の目で墓を確かめに行きました。確かに、主イエスのご遺体は、あるはずのところに見当たらなかったのです。

ところが、それから間もなく、弟子たちは次々に不思議な体験をしました。あのペトロ＝シモンも、「本当に主は復活して、現れてくださったのです」と言い出しました。エルサレムからエマオに向かっていた二人の弟子も、不思議な体験をしました。その道すがら、見知らぬ人が近づいてきて、一緒に歩き始めたのです。二人は、ずっと気づかなかったのですが、その人は主イエスでした。姿は見えなくても、主イエスだと後で分かった、というのです。

イースターを祝ったわたしたちの歩みにも、ご復活の主イエスが近づいてきて、一緒に歩み始めてくださっています。最初は分からなくても、あるとき、分かるようになるのです。「主イエスが生きていらっしゃる」ということの意味が、分かるようになるのです。

「一緒にお泊りください」

先週のイースターの祝いでは、四年ぶりに軽食をご用意いたしました。祝いの挨拶を何人かの方にしていただいた後、皆さんは、それぞれに食事の交わりを持ってくださったことでしょう。用意したものは祝いの食事というには物足りなかったかもしれませんが、イースターの喜びを分かち合うには十分だったでしょう。

ところで、そのとき皆さんは、食事の交わりに、見慣れぬ人、見知らぬ人、名を知らぬ人を誰か一人、お誘いくださったのでしょうか。お誘いくださった方は、きっとその食事を通して、主イエスとお会いされたに違いありません。あのエマオに向かった二人の弟子のように。

今日の福音書の出来事は、「エマオへの途上」などの題で多くの画家によって宗教画として描かれてきました。描かれるのは、二人の弟子と主イエスが歩きながら語り合っている場面か、食事の場面か、どちらかです。どちらにしても、絵画では、二人の弟子と共にいる三人目の人物は、だれが見ても主イエスと分かる姿で描かれています。

福音書も最初から、三人目の人物が主イエスであることを少しも隠してはいません。けれども、二人の弟子は、終始、自分たちと同行し、目の前で食事をする人物が主イエスであるとは分からないままであった、というのです。さらに、その人が食事の席でパンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いて渡したときに、二人は突然目が開け、**イエスだと分かった**というのですが、**すぐにその姿は見えなくなった**ともいうのです。

その人は、二人にとって、どこまでいっても見知らぬ人にすぎませんでした。二人は、主イエスのことを知っていました。その顔立ちも、背格好も、声も、分かっていました。二人から見れば、その人は、明らかに主イエスではなかったのです。ですから、主イエスだと分かって語り合ったわけでもなく、主イエスだからと無理に引き留めて一緒に泊まったわけでもないのです。食事を一緒にしたのは、宿を共にした成り行きからでしょう。

どうして、彼ら二人は、目的地の村に着いたとき、**なおも先へ行こうと**するその人を、引き留めたのでしょうか。「**一緒にお泊りください**」と、同宿を申し入れたのでしょうか。「**旅は道連れ**」と考えたのでしょうか。「主イエスならば、そうされた」と考えたからではないのでしょうか。

主イエスは確かに、見知らぬ人を放っておかれない方でした。今まで付き合いがなかった人でも、ご自分の食事の席に招かれるような方でした。その姿を見て、ただの宴会好きだと揶揄した者もあったようですが、その主イエスの振る舞いによって生き方が変えられた者もいたのです。たとえば、徴税人ザアカイのように（ルカ 19:1~10）。

主イエスだと分からなくても

エマオへ向かった二人の弟子たちの中には、確かに、主イエスの教えが蓄えられていたでしょう。語られた言葉だけでなく、主イエスがなされた振る舞いも、記憶の中にあつたに違いありません。とは言え、そのような記憶があつたとしても、それが引き出されなければ、宝の持ち腐れです。ましてや、このとき二人は、かつて主イエスに抱いていた望みを打ち砕かれたばかりでした。心酔していた教えが、結局は十字架の死に至るものにすぎないとしたら、何の役に立つだろうかと、疑問に思い始めていたかもしれません。今さら、主イエスの教えに従って行動しようとする意味があるのでしょうか。

もしかすると、近づいてきて一緒に歩き始めた見知らぬ人と話す中で、二人は、かつて聞いた主イエスの教えが呼び覚まされるようなことが起こっていたのかもしれませんが。二人は、一連の出来事を経験して、どこか失望感を抱いていました。けれども、その見知らぬ人は、失望ではなく希望を語って聞かせたのです。「聖書」が伝える古く長い神の出来事の物語から、主イエスのなされたことが大いなる希望であることを語って聞かせたのです。

二人の弟子が、食事の席で目が開け、その人が主イエスだと分かつたというのは、その人の中に主イエスの姿を見た、ということなのでしょう。その人もまた、確かに主イエスならばなされたように、自分の旅を中断して、二人からの同宿の申し入れを受け入れたのです。主イエスがなされたように、パンを取り、賛美の祈りを唱え、パンを裂いて分かち合つたのです。二人は、その人の中に確かに主イエスが生きていることが、分かつたのです。姿はそう見えなくても、分かつたのです。

それは、二人の中で、主イエスが生き始めた瞬間でもあつたのではないのでしょうか。目の前の見知らぬ人の中に主イエスが生きていらっしゃることが分かつたとき、彼らは、自分自身の中で生きてくださる主イエスを見るようになったのに違いないのです。「わたしたちの心は燃えていたではないか」と。

イースターを祝い、主イエスのご復活を記念するわたしたちは、何も超自然的な復活現象なるものを信じるように求められているわけではありません。たとえそのような超自然的な復活現象を非科学的な迷信だから信じられないと考えるにしても、わたしたちは、イースターを祝い、主イエスのご復活を記念することはできます。ぜひとも、そうすべきなのです。

たとえ主イエスだと分からなくても、その人と道を共に行く。たとえ主イエスだと分からなくても、引き留めて宿を共にし、食事を共にする。その人の内にも、わたしたちの内にも、主イエスが生きていてくださることを知っているからです。だからわたしたちは、今の時代にも、そして今日も、イースターを祝い、ご復活を記念するのです。